

一 方便品の事

妙法蓮華經の五字は名体宗用教の五重玄義なり。されば止観に十章を釈せり。此の十章は即ち妙法蓮華經の能釈なり。夫とは、釈名は名玄義なり。体相・攝法の二は体玄義なり。偏円の一は教玄義なり。方便・正観・果報の三は宗玄義なり。起教の一は用玄義なり。始めの大意の章と終はりの旨歸との二をば之を除く。此の意は止観一部の所詮は大意と旨歸とに納まれり。無明即明の大意なる故なり。無明とも即明とも分別せざるが旨歸なり。今妙法蓮華經の五重玄義を修行し奉れば、煩惱即菩提・生死即涅槃の開悟を得るなり。大意と旨歸とは法華の信心の事なるべし。「信を以て入ることを得たり。己が智分に非ず」とは是なり。我等衆生の色心の二法は妙法の二字なり。無始色心・本是理性・妙境妙智と開覚するを大意とは云ふなり。大は色法の徳、意は心法の徳なり。大の字は形に訓ぜり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と唱へ奉る男女貴賤等、色心本有の妙境妙智なり。父母果縛の肉身の外に別に三十二相・八十種好の相好之無し。即身成仏とは是なり。然る間大の一字に法界を悉く収むるが故に法華經を大乘とは云ふなり。一切の仏・菩薩・聖衆・人・畜・地獄等の衆生の智慧を具足し給ふが故に仏意と云ふなり。大乘も仏意も同じ事なり。是即ち妙法蓮華經の具徳なり。されば九界の衆生の意を以て仏の意とす。一切經の意を以て法華經の意とす。「一仏乘に於て分別して三と説きたまふ」とは是なり。かゝる目出度き法華經を謗じ奉る事は三世の諸仏の御舌を切るに非ずや。然るに此の妙法蓮華經の具徳は、仏の智慧にても計り難し。何に況んや菩薩の智力及ぶべからざるなり。之に依って大聖塔中偈の相伝に云はく、一家の本意は但一言を以て本と為すと。此の一言とは寂照不二の一言なり。或は本末究竟等の一言とも云ふなり。眞実の義には南無妙法蓮華經の一言なり。本とは凡夫なり、末とは仏なり、究竟とは生仏一如なり。生仏一如の如の体は所謂南無妙法蓮華經是なり云云。